（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　松浦　史子

本論は、六朝の詩人・郭璞(276－324)と江淹(444－505)が、中国古代の神話的地理誌『山海経』をいかに受容し、その思想と文学の糧としたかを考察したものである。郭璞が『山海経』に膨大な注釈を施したことはつとに知られる。しかし郭璞が『山海経』に基づき制作した韻文作品『山海経図讃』については、まだ十分な研究が行われていない。本論の主要な成果の第一は、郭璞の『山海経図讃』「崑崙丘」を分析し，郭璞独自の世界観を明らかにしたことである。郭璞は「江賦」など水を素材とした多様な作品を残しているが、『図讃』において崑崙を「水の霊府」と呼んでいる。崑崙に関する歴代の言説をたどっても、このような語は見出せない。松浦氏は郭璞の他の作品と合せて考察を進め、天地を貫いて聳える崑崙が、全世界の水の循環をつかさどり、宇宙の安寧を守るという特異な世界観の存在を指摘した。

成果の第二は、『山海経』との関わりから、詩人江淹の新たな像を提起したことである。従来我が国で受け入れられてきた江淹の像は、模擬作を得意とする美文派の代表で、その作品の特色は「機知性」や「遊戯性」にあるとするものが主流である。一方中国では、江淹を、政治的不遇や家族の不幸による悲哀を、抒情的作品に詠った詩人とする。江淹が『山海経』を愛好し、その作品にも多くを取り入れていることは、江淹研究・『山海経』研究のいずれにおいてもほとんど論じられていない。

松浦氏は、江淹が『山海経』の欠落部分を補う目的で、『赤県経』という著作を手がけたという『南史』の記述に着目し、明の胡之驥によって『赤県経』に比定された作品「遂古篇」を詳細に分析した。その結果、江淹は郭璞注をとおして『山海経』を理解していること、「遂古篇」は郭璞同様、『山海経』の世界を実在するものと見なし、最新の史書の辺疆誌によって、郭璞注を拡充しようとする著作であること、またそこに郭璞注には欠けていた仏教世界に関する情報を加えていることなどの諸点が明らかになった。さらに両者を比較し、本草鉱物に通じ博物学的知識が豊富なこと、古文字や古物を愛好すること、『山海経』に多用される「丹」「碧」という鉱物質の色彩を自然描写に好んで用いることなどの点で、江淹は郭璞と共通し、「赤虹賦」のように、自身が出会った不思議な現象を、あたかも科学者のような目で観察し記録する作品をいくつも残していることを指摘した。本論によって示された江淹の像は、江淹に対する従来の理解に大きな改変を迫るものであろう。

成果の第三は、郭璞と江淹の『山海経』に対する受容に、時には大きな隔たりのあることを明らかにしたことである。『山海経』「中山経」には「姑媱山の帝女が死して化した」という「**峽**草」の記述がある。郭璞は、古の帝王を崇拝する儒家的思想に基づき、「**峽**草」は「君子の佩するもの」であり「佩すれば人に敬愛される」と解釈する。一方江淹は「姑媱山の帝女」と宋玉「高唐賦」およびその逸文に描かれる「巫山の神女」を同一のものとみなし、女性の美が衰えてゆく悲哀を詠う詩語「瑤草」を作り出した。玉の永遠性を持ちながら、儚い命の悲しみを詠う「瑤草」は、江淹の美学を代表する詩語となり、後世の詩歌に継承された。

本論は、郭璞と江淹に対する思想研究の成果を十分に消化しきれていないなど、残された課題も少なくない。だが文学研究の既存の枠組みにとらわれない斬新な発想で、多くの新知見を提出した点で、その意義はきわめて大きい。よって本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。